

---

# 討伐！ もっちょ ↓ みっか

生保内沙翁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

討伐！ もツちエ←みツか

### 【Nコード】

N0133Y

### 【作者名】

生保内沙翁

### 【あらすじ】

異世界に飛ばされた貴族的な木元菊は、「ヴえブリチまでにもツちエ←みツかを倒して戻ってこい、そうすれば元の世界に帰してやろう」という理不尽な申し出をされ、受ける羽目になった（だって、選択肢はないだろ？）。彼は二人の仲間——大佐と呼ばれる男と魔女と呼ばれるバベル——と一緒に、もツちエ←みツか退治の旅に出る。彼はヴえブリチまでに無事目的を達し、元の世界に戻るのだろうか？

斧と魔法のファンタジー・コメディー！

## 一番最初の“一”（前書き）

注1：人種差別ではありません。が、もしそう感じやすい方がいらつしゃれば、読むのをお控えなさってください。

注2：もちろん、この物語はフィクションです。

## 一番最初の“一”

ゴキブリみたいに黒いやつが前を歩いている。

木元菊は足を止め、広がる草原と、森の奥へ続いている踏み固めた土の道を見つめた。彼は水洗いしたキャベツのように汗をかいていた。

ゴキブリみたいに黒いやつが振り返った。

木元菊は、ギターのように背負ったでかい斧についた革ひもの位置をずらし、縦巻ロールの鬘の位置を直してから、何か言われる前に歩き出した。そいつの態度が癪に障るからだ。

それでもゴキブリみたいに黒いやつは、無意味に大声を張り上げた。「急げ！ 我々に残された時間は少ないのだ！」

木元は大声でわめいているそいつの脇を大股で通り抜けると、前方の森だけを見つめて進んだ。そよ風が吹いて、道の脇に生えた草を揺らした。雲も、最高潮に達した陽も、何もかもが自分を馬鹿にしている気がして、彼はいびつな顔をしかめた。

彼よりも一層ひどいしかめっ面をしたゴキブリみたいに黒いやつが、規律正しい歩き方で彼を追い抜いた。ただ、身長が百二十を超さないか程度で足も同様に短いため、その歩きは速足以上の動きをしていた。

木元は上半身だけは悠然としたそいつを後ろから眺めた。頭を髪の毛があれば犯罪とでも呼べそうなほどつるつるにっていて、身の丈に合った軍服を着ている。後ろから見れば、威厳というよりもコミカルな感じの付きまとう姿だ。ただ、そいつが振り返るか、こっちが追い抜いてじつくり顔を眺めれば、威厳か苛立ちあるいは双方を感じるようになる。その顔には眉がなく、落ちくぼんだ眼はほとんど影で、武骨な鼻から岩のような顎まで太いしわが刻まれている。

鼻からは、しわだけでなく鼻水も垂れている。この国共通のことな  
んだろ、と木元は思った。私が引きずり込まれたアナフあベータ  
村の人間は皆、鼻水を流していた。それに、その村人から大佐と  
呼ばれているこいつ同様、村人たちは皆、頬に赤い丸を描いていた。  
木元は不愉快な思いが募ってきたので、その村のことを思い出す  
のは止めた。代わりに、もう一人の同行者へ目を向けた。

バベルだかダンベルだか名乗ったそいつは、大佐よりも二十セン  
チほど高く、真っ黒いローブに身を包んでいる。フードを深めに被  
り、一見して水死体と間違うような顔をしている。食料品を詰め込  
んだリュックを背負っていて、前かがみに一番後ろを歩いている。

あの村で魔女と恐れられているそいつが、木元の視線に気づいた。  
「何か？」と不明瞭な声で尋ねる。

「魔女なら私たちを一瞬で街まで運ぶ魔法ぐらい知ってるだろ」木  
元の声は貴族的ともいうべき甲高さで、怯えたネズミのように聞こ  
える。ただし、調子は傲慢以外の何ものでもない。「他にも、馬車  
を出す魔法とかな」

魔女は膨れ上がった顔を振った。「悪いけど、私の呪文は攻撃的  
なんです。あなたを吹き飛ばすことはできませんが、傷一つ負わず着  
地できるかどうかはあなたの腕次第になります」

「役立たずが」と木元は言って鼻を鳴らし、前方の森に視線を向け  
た。

魔女が何か言った。しかし、それは大佐の声に阻まれて木元の耳  
には届かなかった。

「無駄口は慎め！」大佐は怒鳴った。「歩くこと、辺りを警戒する  
こと、注意はそれだけに向ける！我々はいっ狙われてもおかしく  
ない状況なんだ！」

木元はいら立ちを隠しきれない表情を浮かべていたが、大佐を早  
くも追い越していたので、態度についての説教は始まらなかった。  
彼の脇を忙しそうに足を動かして大佐が追い抜いた。

三人は夕刻近くなつて森に入った。道は草に覆われて消え、枝葉が空を隠して周囲を影で包んだ。先頭の大佐は直進せず、あるところは大回りをし、あるところは直角に曲がつて進んだ。木元はしばらくして気づいたのだが、大佐が回り道をするのは警戒のためではなく、単純に倒木があつて乗り越えるのに苦労するからだつた。木元なら一跨ぎの倒木も、二人にとつては登らなければならぬ小山と同じだつた。

暗闇が森に降りてきて、辺りがまったく見えなくなつてから、大佐が宣言した。

「そろそろ、休憩を取ろう」

木元は足を止め、その場に座り込んだ。魔女は木の幹に背を預けるようにして、荷物と腰を下ろした。大佐は宣言と同時に寝つ転がり、早くもいびきをかくほど爆睡していた。

「こいつは見張りとか考えないのか」

木元は、強力なエンジン音に似たいびきをかいている大佐を軽蔑したように見つめた。その姿は猫のフンか何かを連想させた。

「心配なら、役立たずの私が何とかしますけど？」

木元はその声に嘲笑の響きを聞き取り、鬘を荒々しくむしり取つて地面にたたきつけた。斧を外し、鬘を枕代わりに寝転ぶ。

「まだ根に持つてたのか」彼は転がったままで言つた。「恥ずかしいやつだ」

魔女は何も答えなかった。木元は目を閉じた。彼は汗だくだつたが、鬘を取つたためか、夜の森は涼しく、お腹が空いているのも忘れてうとうととまどろんだ。この鬘はごわごわしているな。

しばらくして何かが不気味な声を発した。木元はハッと目を覚まし、使つたことのない斧を握つて、闇に慣れた目を辺りに走らせた。「この森にはイブカニアという鋭い牙をもつた獣がいます」魔女が深く幹にもたれたまま言つた。「あなたを丸呑みするほどの大きさです。私が結界を張れば、彼らは近づくことすらできませんが」

木元は想像し、しつかりと斧の取っ手を握りしめ、丸まつた。

彼は不安になりながらも精一杯の虚勢を張った。「私を怖がらせようとしても無駄だぞ。おまえがさっきの声を出したんだ」

「なっ」魔女が言葉を詰まらせた。「そ、そんなことは、ありませんよ。今のは、間違いなく、イルカニアの声でした」

「イブカニアだ」と木元は訂正した。

「えっ？」

「イブカニアだ」木元はもう一度言った。説明を加える。「おまえが最初にいった名前はイブカニアだった。それが、イルカニアになっていた」

「そ、そうでした」咳払いをして魔女は続ける。「もちろん、イブカニアです。ちよつとの間違いは、誰にでもあります」

「そうだな」木元は斧から手を放した。身体を伸ばして鬘の位置を直し、目を閉じた。「結界を張っておけよ、イカサマ師」

「イカサマじゃないもん！」

木元は子供っぽい口調になった魔女を相手にせず、大佐のいびきを子守唄代わりに（それにしてもはうるさすぎるが）眠りに落ちた。

## 二番夢の“二”

木元はスカイツリーを背にして立っていた。視線の先には、イタリア系のアメリカ人が彼の渡したデジタルカメラを構えている。どこか冷静なところが、これは夢なのだと告げている。

突然、クイツと引かれたような気がした。木元はスカイツリーを振り返り、そのとき——「ヘイ！」という声で前を向きなおした。アメリカ人が、彼の渡したデジタルカメラの上で、迷惑そうな表情を浮かべている。彼はしかめ面を返し、指を一本立てて——中指ではなく、人差し指だ——もう一度、と頼んだ。アメリカ人は眉を寄せたが、何も言わずにカメラを構えなおした。

木元は気取った表情を浮かべ、スカイツリーを手のひらに載せて、シャツターが切られるのを待った。アメリカ人はその意図を読み、少し下がって、気取った木元と手の上に載った未完成のスカイツリーをフレームに収めた。

また、クイツと引かれる。今度は少し強かったので、木元はバランスを崩し、立て直した。後ろを振り返って、少し離れたところを歩いていた東京人に睨みを利かせる。

「ドント・ムーヴ」アメリカ人は言った。後の言葉は小さな早口だったので、木元の手に残った。「メイキットスナツピイ」と聞こえた。

「オーケー、オーケー」と木元は言って、ポーズをとった。

二度、シャツターが切られた。彼はカメラを返してもらい、お礼をつたない英語で——「サンクス、ベリーマツチ」——言いながら、撮れた写真を確認した。ま、素人にしては、なかなかうまく取れてるじゃないか、と彼は思った。私の魅力的な顔が、引き立ってるな。彼の顔は、どこかの惑星では、魅力的かもしれない。輪郭は、い

びつな形をしたホームベースで、薄い切れ込みと豚のような鼻をつけている。丸い目は愛嬌を見せることができるものの、普段はビームと大差ない。整った眉はへの字を描き、短い逆立てた髪の毛の生え際はしっかりしている――が、今は縦巻ロールの髪をかぶっているの、自慢の生え際は隠れている。

彼が写真を覗き込みながら、次はどこで撮ろうか、それとも携帯電話を買いに行こうか思案していると、また引つ張られた。今度の引きは強力だった。彼はよろけ、バランスを立て直そうと腕を大きく振り……引きがさらに強くなって……飛び上がった。そう、そんな感覚で、周囲の景色は一変し、田舎じみた香りが彼を包み込んだ。上昇から一瞬の無重力を（木元は髪が浮くのを感じた）体験して下降に入った。

「いやだあ」木元は自分でもわからない悲鳴を上げた。「許可を！許可を取ってから……」

彼は腕から固い地面に落ち、ボールのように転がった。勢いが止まると、そこには空があった。彼はそれを丸い目で見つめた。無感動で思考のない一瞬、彼は死んだも同然だった。そういう時の顔は、解剖されそうなカエルとよく似ていた。

数秒待つて彼は上半身を勢いよく起こし、視線をあちらへ、こちらへと移した。

そこは都心にも郊外にも見えなかった。踏み固められた地面、全体を囲むような木々、木造の小さな家。彼がいるのは広場らしく、噴水の代わりに井戸がある。そして、小さな黒い人、人、人。長くて太い腕、短い脚、ピエロのように赤みのある頬、だらしなく鼻水を垂らした武骨な鼻、横だけが異様に長い黒い髪、太くて黒い眉、汚水の流れる溝にこびりついた水垢のような、灰色がかった黒い肌。

木元は恐怖の悲鳴を上げた。

場面が変わるように、夢が声を運んでくる。

「ヴエブリチまでに」それは裁判長じみた口調の村長の声だった。「もツちエーみツかを倒して戻ってくれば、元の世界に帰してあげ

よう」

今は、氣取った落ち武者のような村長が現れてから一分後、木元が集団に囲まれ——強烈な恐怖を覚えて混乱の粹を極め——会話ができるようになってから三十分ほど経った後だ。その前は……その前は確かに普段通りの世界で、昼を少し回ったところだった。が、ここは朝の早い時間になっている。

「なぜ私がおまえらのいうことに従わなければならないんだ！」

木元の猛烈な抗議を無視して、氣取った落ち武者は続けた。「ヴえブリチまでは、暗闇がこれだけ——」落ち武者は大きな手を見せ、三本の指を立て、二本を丸めた。木元と同じ五本指の手だった。「——訪れるだけある。それまでに戻れなければ、元の世界に帰ることはできない」

「なぜ私がおまえらのいうことに——」

「ヴえブリチまでだ」村長は遮り、木槌があれば振り下ろしそうに、太い腕を動かした。「期限を守れ」

「だから、なぜ——」

「もツちエーみツかを倒すんだぞ！」

彼はそこで、これは聞いてみる価値があると判断したのだった。もツちエーみツかは、村人の説明によると、ドラゴンに似た生物だとわかった。その生物の体長は、村人の身長からして巨大で、彼らの小さな三角の家を丸呑みできるほどもあり、もツちエーみツかとは、名をつけるときに使う言葉で『神の懷』を意味するらしい。

どんな神なのか知らないが、と木元は夢の中で思った。あいつらサイズの神なら、懷の具合もたかが知れているだろう。コモドドラゴンかもしれない。コモドドラゴンなら、この斧で叩き切ってしまう。とにかく、この重たいだけの斧も、それだけの役に立つ必要があるんだ。まずは、ストロンボ街へ行く。そこでコモドドラゴンの生息地を聞き込み、探してそいつの頭を叩き割れば……。

案内兼護衛役の大佐（彼は村人の推薦）と魔女（こっちは名乗り出た）が仲間に入る経緯を夢で思い出しかけ、今度は学生時代に飛

んだ。しかし、そこでも後ろから引かれる感じを覚え、またアナフあベータ村に戻ってくる。そして、腐れ落ち武者村長の言葉を聞く。「ヴえブリチまでももツちエ←みツかを倒して戻ってくれば、元の世界に帰してあげよう」

ヴえブリチって何だろう。期限って言葉を、この国流に言つとヴえブリチになるんだろうか。彼はちくわみたいに空洞の頭を働かせて考えた。腐れ落ち武者村長が彼の両肩を大きな手でつかみ、三メートル離れて見ても我慢のならない顔を十数センチのところに置いて、同じ言葉を繰り返した。

「ヴえブリチまでに……」

身体が前後に揺れ、そして、顔に強烈な痛みが――。

### 三番食事の“三”

木元は目を覚ました。辺りはまだ暗く、寝起きのためか霞がかった。月明かりが照らす薄闇の中に、大佐のいかめしい顔が浮かんでいた。本能寺で炎に包まれても哄笑を上げそうな顔だった。

「とつと起きんか、このうすのろ！」

木元はなぜか痛む顔をさすりながら起き上がった。あくびをし、伸びをして、大佐の巨大な拳骨に殴り飛ばされた。眠気は吹き飛んだが、意識も吹き飛ぶところだった。

「私に気安く触れるな！」木元は何かにすがりつこうとしている恰好のまま、頬に手を当てて叫んだ。「おまえが大佐なら私は貴族だぞ。敬意を払え！」

魔女が身じろぎをして、子犬がどうのこうのと寝言のようにつぶやいた。背にしていた幹から滑り、地面に寝転がって、食料品の詰まったりリュックを縫いぐるみのように抱えている。

「貴族だろうと何だろうと、もツチエーミツかを倒すまでは戦士だ！」と大佐は怒鳴った。

魔女がもう一度身じろぎをして、上体を起こし、目をこすりながら言った。「うるさいなあ。いったい何事？」

「出発の時間だ」大佐は珍しく静かに答えた。「手早く食事を済ませるんだ」

魔女は目をこするのをやめて、森を見回した。

「まだ夜だけど？」

「いや、早朝だ」

「夜が明けるまで待てばいいよ。それほど急ぐ必要もないから」魔女は寝転がりながら言った。あくびをして続ける。「森は後少しのはずでしょ。抜ければ小さな山を越えて、夜までにはストロンボ街に着くよ」

「我々はもツちエーみつかを倒さなければならんだ！」大佐の怒号が響き渡った。「帰る期間も勘定に入れなければならん。夜までに着くなど、話にならん！」

「あれの居所はすぐにわかるよ。国の出した討伐隊もいるし、私たちが協力するといえば、情報の一つや二つ貰えるはずだし」

大佐の唸り声が響き、森中の鳥が飛び立った。

「いいだろう、わしとバベルの意見は分かれた。決めるのは木元、おまえだ！」大佐は言って、口を開きかけた木元を制し、言葉を続けた。「一つだけいっておくことがある。バベルの案に従えば、街に着くのは夜になるだろう。わしの案に従えば昼前には着く。ストロンボ街の宿は人気だ。夜着いても、部屋が埋まっっていて、また野宿ということになるかもしれん」

木元は重々しくうなずいた。決定権が彼の頭の中で主導権へと変わっていた。彼は自分是有利に立っていると考えて、機嫌がよくなった。立ち上がり、口を開く。心の中で叫んだ。私に媚びろ、愚民ども！

「この人の決定を待つ必要はないよ、大佐」魔女が素早く立ち上がって荷物を引つ掴んだ。畏まった口調で続ける。「話を聞いて感銘を受けました。私はあなたの案に従います」

「決まった！」大佐は雄たけびを上げた。「食事後に出発だ！」

木元は開いた口を閉じきれないまま、言葉も思いつかずに呆然となった。何がこんなにイラつくのだろう、と彼は考えてみなければならなかった。まるで、待ちに待ったものを差し出され「これはおまえのものだ」と宣言された後で、奪い取られたかのようなのだ。だがそれは結局、あいつとあいつが要らないと言うから……では、主導権が向こうにあったから、イラついているのか？それに素早く手を伸ばさなかった自分のうすのろさへの苛立ちが加わっているのか？

木元菊が神経に触る元凶を捜している間に、魔女は荷物から食料を取り出し、手早く朝食を作った。大佐は自分の太い手ごと食いちぎりそんな勢いで食事を済ませると、木元をどやしつけた——「早

く食わないと昼まで食事抜きだぞ！」

内にこもっていた木元は、追い立てられるように食事を済ませた。そして三人は出発の準備を整えた。

「早く着けば、それだけ早く休めるぞ！」と大佐が言って先頭を切った。

## 四番戦闘の“四”

イブカニアは本当にいた。そいつは唐突に現れた。

魔女が夜間を安心して過ごせるように張っていた結界を解いた時、待っていたように連中は姿を見せた——そう、複数が取り囲んでいたのだ。

まず最初に、大佐が一呑みにされた。

別のやつが木元に襲い掛かり、彼はまだ手に持っていた斧を振ってそいつの口元を切り裂いた。他の何かにも当たったようだった。彼の頭の中でもとりわけ冷静な部分が、白くてでかい狼だとイブカニアを分析した。彼は逃げようと振り返り、囲まれているのを知ると、身を守るように斧を構えた。

「ま、魔法だ」彼は気狂いのように甲高い声で叫んだ。「魔法を使うんだ！」

声は森を貫いたが返事はなかった。木元は無性に苛立ちを覚えて魔女に視線を向けた。魔女は後頭部で両手を組み、地面に臥せっていた。木元は悪態をつきかけて、死の手が首筋を撫でるのを感じ取り、闇雲に斧を振り回した。最初の一振りが、鋭い爪をむき出しにしたイブカニアの前足を切り裂いた。次の一振りは空振りし、その次も同じだった。

ビギナーズラックは長く続かない。油断していた肉食獣どもは、引き攣った顔で凶器を振り回している獲物を観察するように、取り巻く輪を広げた。線でも引いてあるかのように距離を保ったまま、うろつろとしながら様子をうかがう。

「木元さん、やめて！」鋭くも明瞭な声が怒鳴った。「私に当たる！魔法で片付けるから、その場を動かないで！」

木元は聞いたことのない声に驚き、斧が空ぶってばかりなのに気づき、我に返ったように手を止めた。運動などとは縁がなかったの

で、彼は早くも荒い息を吐き、疲労で今にも倒れそうだった。

木元が斧を振るう手を止めると同時に、肉食獣どもが躍りかかってきた。彼は全身の力が抜けるのを感じ、膝が折れ曲がって、地面に坐り込んだ。土下座すれば見逃してもらえるだろうか、という考えがよぎった。

肉食獣どもは鋭い牙をむき出しにして、大佐を一呑みにした口を広げ……鼻面にしわを寄せ、金色の月のような瞳で彼を睨み据えている。が、一向にその牙は届かず、前足を振るって切り裂こうとする爪は空を切るばかりだった。

木元は股座が濡れていることを、目の前の光景と同様に幻想だと信じ込みながら、呆然と宙に浮いたままの肉食獣どもを見つめていた。

「大佐も油断したね」凜と響く声が言った。「この程度の獣に呑み込まれるなんて」

木元は座り込んだまま、首だけを動かして声の方に顔を向けた。そこに立っていたのは、後ろで栗色の髪をまとめた、聡明な瞳の少女だった。魔女の着ていた黒いローブを身につけているが、フードは下ろしてある。その少女は木元の視線を捉えると、背筋が凍るような冷たい薄ら笑いを浮かべた。

「あなたが私を後ろから殴ったりしなければ、もっと早く片がついていたのに」彼女は言った。「大佐も——あっそうだ、大佐のこと忘れてた」

彼女が中指と親指でパチンと音を鳴らした。木元は停止しかけた思考で、何が起るのかとイブカニアに目をやった。そこで彼は、肉食獣どもが宙に浮いているのは、木の枝が連中を吊し上げているからだと気づいた。そのうちの一匹を吊している無数の枝が動いた。枝は獣の身体をからめ捕るように這い、噛み千切ろうとする頭を押さえて、口を大きく開けさせたまま固定した。数本が開いた口から喉の奥へ侵入する。獣は圧倒的な力にあらがおうと狂ったように体を動かしたが、からめ捕った枝は仲間を増やし、その動きを完

全に封じた。

木元は眺めているだけで気分が悪くなってきたものの、目をそばに別のことに――特に頼りない括約筋の野郎――に気づくので、仕方なく枝の動きを見守った。

喉の奥に侵入した枝は、その侵入口をさらに広げながら、奥から胃液に包まれた塊を引きずり出した。枝に包まれたその塊は、地面にゆっくりと下ろされた。繭が解けるように、枝がその包みを開いていく。それは呑み込まれた大佐だった。大佐は厳しい表情を浮かべたまま、目を開けていた。彼は素早く立ち上がり、何事もなかったように、宙づりにされた肉食獣どもを見上げた。

「腹が減っていたんだろうな！」彼は快活な声で言った。「わしを油断させるとは、流石はウートレイ国で最も恐れられている獣、ということなんだろう！」彼はフードを目深にかぶった魔女に視線を向けた。「礼をいうぞ、バベル。助けてもらわなくとも、わしはいずれ自由になっただろうがな」

「知ってるけど、今回は期限もあるから」と不明瞭な声で魔女は言った。

木元は見なくてもその顔が水死体のような仮面をつけていることに気づいていた。だが、彼はわざわざそれを見て確認した。眼をそらしたいことが一つだけあった。彼もまた何事もなかったように立ち上がり、被り忘れていた髪を頭に載せ、革ひもをたすき掛けにして斧を背負った。

「こいつらはこのままにして、出発しよう」と彼は甲高い声で言った。

「そうだな」大佐はうなずいて言った。「余計な手間がかかってしまったからな。おまえが漏らしたことなどを気にして、時間をつぶすわけにもいかん」

「私は……」木元は口を震わせ、顔を真っ赤にした。「私は漏らしてなど――」

「出発するよ、お漏らしさん」と魔女は言っ、リュックを背負い、

歩き出した。

大佐が先頭に立つため、足を忙しく動かして後に続いた。木元は恥辱にまみれ、怒りで顔を真っ赤にしたまま、突っ立っていた。

顔を上げ、宙づりのイブカニアに指を突きつける。「おまえたちのせいだからな、この、この犬っころども！」

イブカニアが唸り声を上げたが、木元はそれを鼻で笑った。濡れて気持ちの悪い股座を乾かすように、ガニ股で二人の後を追う。宙づりのままの肉食獣どもは、執念深い眼差しを彼に向けていた。

## 五番山の“五”

山の乾いた風と日差しによって、濡れた下着とズボンはすぐに乾いた。

山？ そう山だ。

迷うことなく森を抜け、三人は踏み固められた山道を進んでいた。日差しは地平線と中天の間にあり、個人的な恨みでもあるかのようにな、灼熱の炎を一行に投げかけている。道端に生えた草は、生まれながらの敗北主義者のようにうなだれている。

魔女も寝不足のためか、ほとんど同じ姿をして歩いていた。大佐はいつものように先頭を歩き、歩幅のために二番手についている木元は……彼をはたから見れば、斧と言う乗り手を乗せたがに股の馬だった。ずり落ちないよう首の後ろまで持ってきた鬘はたてがみのように見え、時々風になびいている。手は地面につかないもののだらりと垂れ、腰はほとんど直角に曲がっている。

二人はあくびをした。

大佐が振り返って険しい顔を木元の黒い短髪に向けた。「何だそのザマは！ 股座の臭いでも嗅いでるのか、木元！」

「ああ、そうだ」彼は投げやりな返事を返した。「乾いてるかどうか確かめてたんだ」

「あなたはよっぽど疲れているようですね」

「ああ、そうだ」木元は同じ返事を返した。「ズボンは、私の喉のように乾いてるぞ」

魔女がため息をついた。「休憩を取らないと、大佐。この速度だと、夜までにたどり着くかも怪しいよ」

大佐は唸り声を上げた。うなだれた草木が一瞬だがしゃんとしたように見えた。しかし、それは音の過ぎ去る速さで元の姿に戻った。

大佐は二人の様子を改めて見て、大きな手と太い指で先を示した。

「この先に村があつた。そこで休憩を取る」

確かに村が、かつてあつた。山道を少し外れたところに、山の湧水でできた小川の流れる小さな平地が、そこに広がっていた。村を示す木の立札は残っていて、それには『息を吸い込むような名前ヒイツポ村』と書いてあつた。かつてはうまい空気を吸って働く村人もいたのだろうが、今は無人の静けさと木造の建物の残骸が、自然の一部と化している。その自然の一部、凱旋門の半分ほどの大きさの大岩には、はつきりとした爪痕が焦げ跡とともに生々しく残っている。

三人は小川のほとりに腰を下ろし、早めの昼食を取った。大佐は自然に感化されたのか、怒鳴り散らすこともなく、物静かに呼吸をしながら食事をした――が、手まで食い尽くしそうな勢いは変わらなかった。魔女もまた、水死体のような仮面を外し、清々しい空気を吸って和んでいた。

木元だけは、そうだったものと縁を切っていた。彼は小川に頭を突っ込んで冷えた水を飲むと、もぎたてのトマトみたいな新鮮さで顔を上げ、生き返った喜びをいびつな顔全体に浮かべた。そして、食事を済ませ、斧を外して寝ころがった。

鼻水を垂らし、十八歳未満は閲覧禁止と表示されそうなほど恍惚とした表情を浮かべた大佐にも、ロリータ・コンプレックスを抱えた中年の、垂涎的のにもなりそうな魔女の素顔にも、彼は目もくれず（彼の美德は金持ちか貧乏かでしか差別しないということにあった）廃墟と化した村の残骸を、自慢の眉で皺をつくって見上げた。

「金目のものは残っていないだろうな」と彼は言った。

「そもそもが、貧しい村だったから」

「ただ、ここの料理は格別だった」と大佐は言いながら下着一枚になり、準備運動を始めた。

「水浴びですか、大佐？」

「うむ。一緒にどうだ、バベル？」

「そうですね」

「私は遠慮しておく。下賤の者に見せる肌は持ち合わせていないからな」

準備運動を終えた大佐が、下着を脱いで小川に飛び込んだ。水しぶきが上がり、それが治まるころには……彼の姿は消えていた。水音で下流に視線を向けた木元は、水流の勢いか、底の深さか、あるいは両方によって、流されていく大佐を見つけた。鮭を取る熊が如く、猛烈な速さで腕を振るい、上流に向かって——と言うより、それ以上流されないように——泳いでいる。

「服くらい洗ったらいいのに」と何食わぬ顔で黒いローブを脱いだ魔女が言った。その下には黒い肌着を身につけていた。

木元は助けを求めない大佐の頑張りから目をそらし、乾いたズボンに視線を落とした。そして、自問する。洗濯したいか？ うん。水浴びしたいか？ うん。脱ぐのは嫌か？ もちろんだ！ そこで彼は起き上がり、ばしゃばしゃ言わせている大佐の二の舞を避けるため、足場を確認しながら一歩また一歩と足を進め、川の中に入って行った。

「この村で採れる食材は、水と豊かな土地のおかげで——わっ！ こつちを見ないで！ 馬鹿！ 変態！」

木元は魔女に向けた視線を、腰まで浸かった水面に向けた。川の流れは激しいが、しっかり足をつけていれば、流されることはない。彼は股座の汚れを落とそうと、こすってみた。落ちたかな？ 落ちただろうな。

「裸とは目に入るものであって、目に入れるものではない」とは日本人の言葉だ」彼はズボンと下着をこすりながら言った。「私は日本人だから気にならないが、村人がいれば変態の称号をおまえにあげただろうな。ゴミと一緒に」

「その前にあなたは縛り上げられて川に流されてるから、少しも気にする必要なんてないですよ」

実際、川に流されそうになっている大佐が、気にしてほしように、バタ足で盛大な水しぶきを上げた。しかし、顔は峻厳で慈悲の欠片すら求めていない。木元は彼にちらりと目をやって、ようやくバタ足を習得したのか、と思った。なぜ岸に向かって泳がないのだろうか？「それに」魔女は盛大な水しぶきも目に入らなかった様子で続けた。「私はこの村の出身だから、そんな変な称号もゴミも投げつけられたりしないんです」

「日常茶飯事だったというわけか。家がなかったんだな」

「あるよ！……いえ、あった、ですね。もツチエーミツかが現れるまでは」

木元はコモドドラゴンが暴れ、家々を破壊する姿を想像してみた。ああ、あいつはすばしっこいぞ！魔法だ、打て！いや、待て！待ってくれえ。俺の家が……。

「なるほどな」

「木元！バベル！」大佐が水流に邪魔されながらも叫んだ。「わしの屍を越えて行け！」

彼は力尽きるというよりは、自ら泳ぐのをやめたように見えた。

峻厳な顔そのままに水に飲まれ、流れて行った。木元の頭の中で、

『一人脱落』の文字が浮かんた。

「あいつ逃げやがったぞ。偉そうにしてたわりに、ドラゴンと対峙するのが怖くなったんだ！卑怯者め！」

「ん、大佐のこと？」魔女の声は、大佐の存在を忘れていたかのよう響いた。「逃げるなんてこと、あの人は考えてないと思うよ。」

この川はストロンポ街まで続いているから、たぶん向こうで合流するつもりなんだよ」

少し考えて木元は言った。「その方が楽そうだな」

「行きたいなら、どうぞ。ただ、途中に滝が二、三あるよ。岩もごろごろしてる。大佐でもない、無傷でたどり着くのは難しいかも。私はあの人ほど頑強じゃないから、陸路を行くけど」

「ま、散歩も貴族のたしなみか」

二人は、陽がほんのわずか傾く間に、服を着、荷物を背負い、ヒイツポ村を後にした。木元はしぶ濡れだったので、服が乾くまで不快感とともに無言で歩いた。乾燥した髪は頭の上に乗っかり、いつもの定位置に収まっている。そいつだけは幸せそうだった。

山道は上りから下りに変わりつつあり、穏やかな風が吹き、太陽が昇ってさらに気温が上がった。

彼は魔女に尋ねた。「山を越えれば、何だって？」とにかく彼にはそう聞こえたのだ。

魔女はフードから覗く水死体のような顔を彼に向けた。首を心持傾げる。

「何のことですか？」

「山を越えたら、とか何とかいったら？」

「いいえ……ああ、ずいぶん前なら」

「麓があるなり、丘があるなりするんだろ。ドラゴンはそんなに移動したのか？」

「翼があるんです。あれならひとつ飛びですよ」

木元はコモドドラゴンを頭の中で描き、翼を付け足した。ま、そうだろうな、と彼は思った。鳥だって翼がある。何も不思議なことではない。渡り鳥サイズなら、山ぐらいひとつ飛びだろう。

「そいつは、今までどこかに隠れてたのか？」

未発見の鳥類もいることだし、その可能性はあるだろう？

「海を渡ってきたのかもしれませんが」魔女は答えた。「あの巨体だから、隠れててもすぐみつかるでしょうし。翼を広げた姿は空を覆うほどあって、尻尾の一振りでは家を粉々に砕くほど。それに、イブカニアの洞ほど巨大な口からは炎を吐くんです。ヒイツポ村に大岩があったのは憶えてるでしょう？」彼女は尋ねたが、木元が答える前に続けた。「もツチエーミツかはあれとほとんど同じ大きなんです。私は少し前に通った場所から見たので断言できません。急いで戻ったけど、村に着いたとき、あれは飛び立った後でした」

木元の思考は、足と同じように停止していた。魔女が彼を追い越

し、振り返った。

「あなたを怖気づかせようとしているわけではないんです」彼女は言った。「もツちエーみツかを見たとき、怯えて混乱してほしくないからいつてるんですよ」

「私が怖気づくものか」と木元は言ったが、頭ではどうやって逃げようか考えていた。絶望的だ。想像していたコモドドラゴンが、ゴジラ並みの大きさになっていた。背負っている斧を意識する。これは、やつの爪切りにちょうどいいぞ。

「でも、国王ももツちエーみツか討伐隊を組織してるから、街へ着いたら倒した後だったということもありえますね」

「そういうことなら、私が手を下すまでもなかったということになるな」と木元は希望を回復させながら言った。

「第一大隊は敗北したと聞いています」魔女は歩きながら言った。

「あなたがやってくる前に、第二大隊を組織中という情報は入りましたが、討伐に向かったかどうかはわかりません」

木元は歩き出していたが、魔女の言葉を聞いて足の速度を落とした。さつさと行けよ、おまえら。

「運がよければ、彼らとともに行けるでしょう」

木元はさらに歩く速度を落しながら、精いっぱい強がりを見せた。「足手まといが増えるだけだ」

魔女がまた足を止めて振り返り、彼に仮面の裏から冷たい視線を向けた。大佐以上に強烈で、辺りの気温が下がるような軽蔑の視線だった。冗談じゃない雰囲気の流れてるぞ、と感じた木元は咄嗟に言い訳を考えて口にした。

「ちょっと」彼はわずかに歩く速度を上げた。「足を痛めたらしくてな」

「足を、ね」

「歩き通しだったから……」

「足を、ね」

「それに」足を止め、靴を脱ぎ、逆さに向ける。「石が入っている

らしい」実際には何も落ちなかったが、彼は大きくうなずいた。「よし」靴を履きなおす。「もう、大丈夫だ」

魔女は何も言わずに前を向き、歩き出した。木元は緊張が去った後の腹立たしさを感じながら、二度と魔女に言い訳などしないぞ、と心に誓って一步を踏み出した。

しかし、街に着くまで彼は一度も魔女の前を歩かなかった。

## 六番街の“六”

うんざりするほど大勢の人がいる。木元より背の高い女性がいると思うと、魔女よりも低い男性もいる。背の低い家々や商店の間に走る道はまるで迷路そのもので、すべてが曲がっている。

二人はその曲線ばかりの街路を歩いていた。陽は中天にかかり、露店からは美味しそうな匂いが漂っている。木元は甘い果実の香りを追い、ごった焼きの匂いを追って、始終顔を動かしていた。彼の鼻の穴はほとんど真正面を向いていて、においや小蠅の侵入を防がないからだった。彼はくしゃみをして蠅を吹き飛ばした。

「宿は？」と彼は前を歩く魔女に尋ねた。大勢の人々に圧倒され、戸惑い、緊張していたため、彼の声は下手くそなバイオリンよりもひどかった。

彼女は振り返りもせず答えた。「宿よりも、大佐を見つけることが先です」

「私はこの忌々しい荷物を置きたいんだ」

「私もそうしたい、です」彼女は言い、振り返った。仮面で表情は読めない。「けど、お金はぜんぶ大佐が持つてるから、宿を見つけても――」

「あのハゲが！」木元は怒りのあまり、口元が震えるのを感じた。

「あんなやつに、どうして金なんか持たせた……いや、あいつは服を脱いだだろ？」

魔女はため息をついた。「皮袋に入れて、肌身離さず持つてゐるはずです。これは仕方ないことなんですよ。この国ではそういう決まりだから。街行く人を見て。理解できるでしょう？」

木元は見た。魔女が歩き出したので、その後を追いながらも見た。何も理解できなかった。彼はそのことを告げた。

「姿と態度に注目するんです」

彼はあの一件があつてから、ひどく従順になっていた（だって、そうたる？）。そこで彼は言われた通り、姿と態度に注目して観察した。

第一に、背の違いがある。低い者は、大佐やアナフあべータ村の連中と同じで、頬が赤く、髪と肌が黒く、眉毛が異様に太くて、象徴のように鼻水を垂らしている。そいつらは大佐よりも着飾っていない。背の高い者は、木元には見慣れた多種多様な顔立ちの連中だ。肌は黒、白、黄色がいて、髪の色も黒、赤、金色、茶色がある。木元の中での一般人と同じだ。唯一の違いは、その連中が腰を曲げて歩いているということだった。

第二に――注目しなければわからなかったが――上下関係があるようだ。ほら、露店で買い物をしている二人組を見てみるよ。一人は大佐に毛が生えたようなやつだ。もう一人は腰を曲げて一七〇はありそうな茶髪の男だ。茶髪が品物を受け取った。毛のある大佐が金を出し、茶髪に渡す。茶髪は金を店員に渡す。バケツリレーみたいだ。他のところでも同じような光景が繰り広げられている。

「最初の金の出所は大佐みたいなものからだな」木元は観察を終えて言った。「やつらは財布代わりなのか？」

「彼らはほとんど誰も信頼しないんです」魔女が言った。「主従関係では彼らの方が主ですけど、付き人には決してお金を渡さないんです。幾分昔には、付き人にお金を持たせることもあったらしいんだけど、王が変わって新しい法律が制定されてからは、こういう光景が当たり前なんです。たとえ似た者同士でも、懐を探り合ってるんですよ」

「けど、あのバケツリレーみたいなのは面倒だろ？」

「バケツ？」

「直接店員に払えばいいだろ。信頼してないのなら、一旦付き人に金を渡す理由がわからない」

「ああ、あれは彼らの保身方法です。手違いがあつた時に、責任を

なすりつけるための、まあ一種の保険なんです」

木元は目立ってきた店で買い物をする人々を眺めた。信頼していないという割には、息が合ってるな、と彼は思った。毎日やってるんだろうな。市場に近づきつつあるためか、ここが市場だからか。人込みは増え、二人は人垣をかき分けて進まなければならなかった。露店で晒された果実、野菜、民芸品や大佐——大佐？

木元は足を止め——後ろを歩いていたやつがぶつかった。いてっ——人の行きかう露店の一つに目を向けた。落ち武者ちつくなやつや泥で遊んだばかりの黒豚みたいなやつらをかき分け、店の前に近づく。間違いない、大佐だ！

彼は振り返り、人込みに消えた魔女に向かって叫んだ。「大佐を見つけたぞ！」

聞こえたかどうか怪しかったが、彼は気にせず店に並んだ大佐に視線を戻した。大佐は——数えてみると十数人いるが——揃いの軍服を着て、峻厳な顔つきで、罨にはめられたことに気づきながら斬首されたように、憤りの表情を浮かべている。こうして見ると、と木元は大佐に手を伸ばしながら思った。仁王像と梅干しの合の子みたいだ。

「お客さん、それ買うの？」腰を曲げた店員が言った。「ゼンマイだよ」

ゼンマイ仕掛けなのか、と木元は思ってた大佐の肩をつかんだ。泳ぎすぎたんだな。岸に向かわなかったのも、丈夫だったのも、これでうなずける。少し縮んだように見えるが、まあ気のせいだろう。それにしても、どれがあの大佐なんだ？

彼は大佐の後ろを覗き込み、ゼンマイネジがないことに気づいた。それを探して、股下から見上げたり、頭上から見下ろしたりしたが、どこにも見当たらない。その瞬間、彼は神がかった英知を感じた。そして、それに促されるようにして大佐の服を脱がし始める。

「お、お客さん」黙って観察させていた店員が、慌てたように言った。「いったい何をするつもりなんですか」

「ネジを突っ込む場所を探してるんだ」木元は手を休めずに答えた。  
「あるいは、そのネジをな」

「困ります」店員は木元の腕をつかんで——「私に気安く触れるな！——と木元は叫んだ——大佐とその服から離れた。「何をつ込む気が知りませんが、商品にそんなことされちゃ困ります！　どんな趣味があるにせよ、買ってからにしてください」

木元は苦虫を噛み潰したような表情で、店員と大佐を交互に見や  
った。本人には直接聞けない、と彼は考える。だが、どうにかして  
あの大佐を見つけ出さなければ、今夜もまた野宿ということになる。  
畜生め！

「一つ聞こう」彼は店員に言った。「どれが川から拾った大佐だ？」  
「はあ？」

「あちこちで回収したことは分かっている。そのうち、どれを川で  
回収したんだ？」

「どれがって——」  
「それは大佐じゃないですよ」とやってきた魔女が店員を遮って言  
った。

木元は振り返って魔女に目を向けてから、整列している大佐に視  
線を戻した。どう見ても、あの大佐だ。確かに、ちよつと縮んでい  
るが。

「第一、動いてないし——」

「それはゼンマイ仕掛けだからだ」と木元は遮って、教えるように  
言った。

「——服を着てます。ゼンマイというのは、これの値段のことです  
よ？」

木元はその言葉を聞いた。理解しようと努め、店員に視線を向け  
る。店員はうなずきを繰り返していた。だが、木元に閃きは訪れず、  
首を傾げて大佐に目をやる。頭の中で何度か魔女の言葉を反復し、  
二十回目でようやくばやけた輪郭をつかんだ。

「確かに似てるけど」大佐を覗き込んでいた魔女は笑い声で言った。

「本物はどこかを歩いてるはずだよ」

木元には納得がいかなかった。

「じゃ、じゃあ動かないのか？」うなずき続けている店員を無視して、魔女に尋ねる。「本当にこれは大佐じゃないのか？」

突然、店員の頭の動きが止まった。

「お客さん、こいつはめど→めさといつて、魔よけなんですよ」店員は魔よけのツルツパゲた頭を撫でて言う。「最近だと徴兵やモツちエ←みツかとかで街の皆は不安を感じてるんです。刺激して襲来してこないのか、本当はどこかの国に戦争を吹っ掛けるつもりなんじゃないか、どこかの酒場にでも入れば、この話題で持ちきりですよ。そこで、こいつなんです」ツルツパゲた頭をパシッと叩く。「大昔の話ですが、この大陸が浸かるほど雨の降り続いた時期があったそうなんです。空は真っ暗闇になり、家は流され、日が射さないので作物は育たない。人々は祈ったが、願いは届かなかった。そして、ついに地面が解け始めたんです」店員は話し慣れているのか、雰囲気づくりに声を潜めたり、張り上げたりして続けた。「大きな大陸も解けて小さくなり、辺りは水で一杯になった。人々は絶望し、上を見るのも下を見るのも嫌になって目を閉じました。しかし、あるとき空に一筋の光が差し込んだんです。人々は目を開け、その希望の光を見上げました。そこに浮かんでいたのが、この顔です！」

店員が両腕で魔よけを掲げたので、木元は見上げてその顔を見た。この顔が浮かんでいたのか、と彼は思った。人々は新たな天災だと思っただろうな。

「そして、その一条の光に乗って、こいつが降りてきたんですよ」店員はその様子を表現するため、ゆっくりと魔よけを店台に下ろした。「人々は駆け寄った。彼こそがこの悪夢を振り払ってくれる人物だとわかっていたんですね。彼は集まった人から鍬を一つ借り、それで耕し始めたんです。彼が一振りすることに風が吹き、その風は暗闇を薙ぎ払った。鍬が地面を打つことに揺れ、地は固まった。そして、彼が耕した田には実をぎっしりとつけた野菜が、果物が育

つたといわれています。それ以来、こいつはめど→めさと呼ばれているんです」

「救世主みたいなものか」木元は言った。「そんなこと、長々と話されてもな」

「私たちはこの魔よけに似た人を探してるんです」魔女が店員に言った。「もツちエ←みツかを倒すために。見かけませんでしたか？」

店員はめど→めさの峻厳な顔つきを眺め、呟いて首を振った。魔女に視線を戻す。

「人探しなら、ば・ろで聞いてみた方がいいですね。あっちの——」  
と言つて指差した。「——酒場がごろごろしてる通りですよ。薄汚いところなんで、普通の人は近づかないんですけどね。しかし、もツちエ←みツかを倒す、ねえ」

魔女は続けて尋ねた。「第二大隊は出発しましたか？」

「本当ならもう出発してるはずなんですけど、ちよつとごたごたがあつたらしくて、次に明るくなつてからということになつたんです」

木元は“ちよつとごたごた”を想像してみた。朝日を受けて、見事に整列した大隊がどこか広いところに集まっている。よく見ると整列した中に一人、左へ半歩だけずれたやつがいる。大隊長が指さして叫んだ。「おまえ、半歩ずれてるぞ！」ずれたやつの一つ後ろが、ずれたやつに合わせて半歩左へ寄つた。「おまえじゃない、その前だ！」と大隊長が叫んだ。今度はその前のやつが右に半歩寄つた。「よし。おまえも合わせろ！」と大隊長が叫ぶと、左へ半歩出たやつの後ろが、左へ半歩合わせた。また大隊長が叫び……いつの間にか受けている日差しは夕暮れのものになつていた。大隊長は半歩出たやつ（まだいた）に叫びかけて止め、空を見上げて別のことを言った。「よし。暗くなりそうだから、出発は明日に延期だ！」

「能無しどもだな」木元は大隊から帰ってきて言った。「明日も出発しないかもしれないぞ、たぶん雨とかで」

「今夜の私たちは野宿ですよ」魔女が言った。「大佐が見つからなきゃね」

二人は店員の指差した、ば・ろと呼ばれる街路へ向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0133y/>

---

討伐！ もツチェ↓みツか

2011年11月13日03時23分発行